

「底が突き抜けた」時代の歩き方 318

「普通に過ごしていること」の中に一杯詰まっている

「普通」でないこと - 映画『バーバー』

01年のカンヌ国際映画祭脚本賞を受賞した映画『ノー・マンズ・ランド』のダニス・タノヴィッチ監督がキネマ旬報のインタビューに答えて、「カンヌでは新人監督賞に挙がっていたけれど、先に脚本賞が決まったんだ。その方がうれしいよね。リンチやコーエンに勝ったんだ」と無邪気そうに語っていたが、いうまでもなくリンチとはデイヴィッド・リンチであり、映画は『マルホランド・ドライブ』である。そしてコーエンとはジョエル、イーサンのコーエン兄弟であり、映画『バーバー』である。リンチもコーエン兄弟も01年のカンヌで最優秀監督賞を分け合った。

タノヴィッチ監督はまた、映画パンフのインタビューで、ボスニア内戦を放映するテレビ番組を見て、世界中の人々は僕たちのことを考え、生活はあちこちで中断し、戦いを終わらせるために、それぞれの指導者たちに介入を求める市民のデモが毎日行われると信じていた」のに、「人々は普通に生活し、散歩をし、海辺でくつろぎ、恋愛をしている」ことに大きな衝撃を受けたとも語っている。世界のある地域で卑劣な残虐行為が繰り返され、住民は絶望のどん底に突き落とされているのに、その事実をテレビや新聞で知りながらも世界中の人々が平然としていられることに、大きな衝撃を感じたのだ。このことは、自分たちがいま被っている惨状は世界中の人々とつながっており、決して孤立しているわけではないとタノヴィッチは考えていたのに、決してそうではなかったということを意味している。

だが、タノヴィッチ自身もサラエヴォを離れて「普通に過ごしている」人々の中に紛れ込むと、「ロシア軍はチェチェンに侵攻し、残虐行為を繰り返していますが、僕たちはくつろいで議論している」という生活をすることになるのだ。では、サラエヴォの絶望的な現実の中で世界中の人々との連帯を夢んでいた彼自身ですら、サラエヴォを一旦離れてしまうと世界中の人々と同じ生活様式になってしまうのであれば、誰もが戦争の被害を蒙る当事者にならない限り、あちら側とこちら側の手はつながりようがないといわねばならない。彼は続けてこう語る。「戦争を離れたとき、ボスニアで起きていることに対する、各国の指導者達や西欧の世論の無力さと拒否の姿勢に苛立っていました。実際、僕は非常な怒りを覚えましたが、怒りは何も生み出しません。時とともに怒りは消えました。しかし、忘れることはないでしょう。ボスニア以外でも、僕は常に辛辣さ

を持ちあわせています。他の紛争、たとえばルワンダやチェチェンに対しても。」

サラエヴォを離れた自分が「普通に過ごしている」人々の中に紛れ込んでしまっているようにみえるとしても、自分がボスニア内戦で味わったことはけっして「忘れない」とタノヴィッチはいう。しかし、「忘れない」とはどういうことなのか。彼は別のところでも、「ただ、“無力な自分”に罪悪感を持ってほしくないんだ。罪悪感からは何も生まれてこないからね。何か自分にできることはないかと考えることを、忘れてはいけないと思う」と語っている。彼の「忘れない」は、「何か自分にできることはないかと考えること」に直結しているような「忘れない」であるということだ。人々と同じように「普通に生活し」ていても、「散歩をし」ていても、「海辺でくつろ」いでいても、「恋愛をしてい」ても、「何か自分にできることはないかと考えること」をやめないということなのである。

もちろん、「何か自分にできることはないかと考えること」は、「自分にできること」を探しだしてきて、すぐさまそれを行動に移すというスタンスをかたちづくることにほかならない。そういえば、戦火のサラエヴォでサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を演出・上演したスーザン・ソントグも、自分が包囲下のサラエヴォに行くのは、「私はサラエボで、自分にとって有益である以上に、サラエボの人たちにとって有益なことをしようと努めてき」たし、サラエヴォをめぐる絶望的な状況の中で、「それでも、何ひとつ起こっていないよりは、何かが起こっているほうがましだろう。私はそんな何かをするために行くのであって、希望を与えに行くのではありません。」と『S A P I O』(94・10・13)で語っており、共通するものが感じられる。

要するに、自分がなすべきことをせよ、そしてそのなかに飛び込め、ということに尽きるだろう。そのためにも、つねに立ち上がる態勢をいかなる場合でもかたちづくっておかなければならないということだ。タノヴィッチもソントグも一人の個人として、自分はそうするというスタンスを強烈に感じさせているが、いうまでもなく大半の人々は、「普通に過ごしている」なかで彼らのように、「自分にできること」を必死に考えて行動に移そうとしているわけではない。それは何故なのか。「普通に過ごしている」なかで、「普通に過ごしていること」にのみ関心を寄せているからだと思われる。いいかえると、「普通に過ごしていること」に向ける関心が一杯であって、たとえ隣が火事になろうとも、自分の家に燃え移って「普通に過ごしていること」が脅かされない限りは、関心を向けない、いや関心が向かないのである。

おそらく「普通に過ごしていること」にのみ向かう関心は、たとえサラエヴォやチェチェンで目を背けたくなるような残虐行為が繰り返されているシーンがテレビで放映されようとも、受け入れる容量をもたない。フィクションではなく、現地ではこのような残虐行為が繰り返されていることがわかって、ひどいとか可哀そうとかの感想が口を

衝いて出てくることはあっても、それは一過性にすぎず、関心としてけっして持続されることはない。残虐シーンの映像を見たときの感想が関心にまで高まってこないのは、その感想が「普通に過ごしていること」の関心のなかに入っていないし、つながらないからだと考えられる。要するに、いまこうして「普通に過ごしていること」とテレビに映しだされる残虐行為が繰り返されている現実とは、同じ世界の現実であるとしても、どうしても別の種類の現実としか思われず、「普通に過ごしていること」とってはフィクショナルな戦闘シーンの映像とさほど変わらないものとして放映されている。

もちろん、所詮は映像にすぎないからだということで済ますわけにはいかない。なぜなら、地雷があちこちに仕掛けられ、砲弾が飛び交う戦場の身近にいて映像ではけっして味わえない緊迫感に包み込まれているのに、「普通に過ごしている」ところからやってきて「普通に過ごしている」ところへ還っていく人たちが、戦場においても「普通に過ごしていること」の安全地帯から戦争を眺めているだけにすぎないことを、映画『ノー・マンズ・ランド』は浮き彫りにしていたからだ。たぶん戦争とはこれまでの「普通に過ごしていること」が崩壊してしまっている現実であって、「普通に過ごしていること」がもはやできなくなっている現実を、「普通に過ごしていること」ができていた現実が理解することも、関心を示すことも本当は不可能なことと思える。なぜなら、理解することによって「普通に過ごしていること」が少しでも脅かされたくないからだ。

しかし、「普通に過ごしていること」というのはいつまでもその状態を維持することができるものなのか。サラエヴォにしてもチェチェンにしてもパレスチナの自治区にしても、住民たちは「普通に過ごしてい」たし、その状態が打ち続くだろうと思っていたのに、彼らの意思に反して戦争が始まり、それまでの「普通に過ごしていること」は音を立てて崩れ去ってしまった。9・11同時中核テロのように、戦争でなくとも乗っ取られた数機の旅客機が超高層ビルに突撃することによって、一瞬のうちに数千人もの人たちの「普通の生活」を突き崩すような事態も起こりうる。「普通に過ごしていること」の崩壊は戦争のように向こうから突き迫ってくるだけではない。「普通に過ごしていること」の内からも突き上がってくるように思われる。なぜなら、「普通に過ごしていること」はじっとしていないで、「普通」の中身を小さく変えたい衝動にたびたび見舞われているからだ。

「普通に過ごしていること」が普通に過ごせなくなっている凄惨な残虐行為を遠巻きにするだけで、その渦中に飛び込んでいく衝動を持たないのは、単に「普通に過ごしていること」を自らの手で打ち壊す勇気を欠いているという以上に、「普通に過ごしていること」のその内部は平坦な道がなだらかに打ち続けているものではなく、「普通」の中身を拡大させたり、「普通」の状態で「普通」ではありえないところへ赴きたいという衝動や欲望がたえまなく渦巻いているからである。「普通に過ごしていること」もまた、

変幻極まりない不可思議な世界であり、人々はそこでの自分だけの小さな格闘にそれぞれ取り憑かれているのだ。したがって、「普通に過ごしていること」を維持し支えているそれぞれの欲望が肥大し、大きな噴出をかたちづくるとき、「普通に過ごしていること」の崩壊が訪れることを直感し、洞察している人々は「普通に過ごしていること」に囚われることなく、「普通」から限りなく自在になってあらゆる裂け目にむかって飛び込むことを厭わなくなる。そして、そこに一つの鮮やかな「普通」でない生き方が示されていく。

コーエン兄弟の映画『バーバー』は、「普通に過ごしていること」が徐々に突き崩されていく様相を、その内部からじっと見詰めつづける作品である。

第二次大戦直後の49年、死んだように静かな北カリフォルニアの小都市サンタ・ローザで、主人公のエド・クレイン（ビリー・ボブ・ソントン）は妻の兄が経営する小さな理髪店で働いている。無表情で口数も少なく、黙々と他人の男の髪を相手に単調な日々を過ごしている。床屋になりたくてなったわけではなく、結婚してたまたま得た職業にすぎなかったということが滲みだしており、夢も理想も情熱もなく、淡々と耐えている存在感の薄い男である。デパートの帳簿係を務める妻のドリス（フランス・マクドナルド）は金銭の出入りを記帳する仕事を好み、店の高級品を一割引で手に入れ、火曜の夜は教会でピンゴに没頭するような女で、エドの覇気のない性分を嫌っていた。

デパートのオーナーであるデイヴはデパートの跡継ぎ娘と結婚してその座を得た男で、エドと反対に、自分の戦争体験を得意気に吹聴し、店の好景気に乗かって自信満々に威張り散らしている。ドリスが新しい支店の支配人になることを喜んでいる姿を見て、エドは妻とデイヴが深い仲にあることに気づき始めるが、取り乱すこともなく表面上は淡々と客の頭髪を刈り取っている。そんなどんよりと淀んで鬱屈していく空気に波風を立てるように、一人の見知らぬ男が客としてエドの前に現れる。そのセールスマンのドライ・クリーニングの新ビジネスの儲け話にエドは引き付けられる。死ぬまで人の頭髪を触りつづけるだろうと思っていたエドは、床屋の使用人という一生うだつの上がない日常生活から脱出することをひそかに夢みていたのだ。「普通に過ごしていること」の中でエドは変化を求めて動きだしたのである。

投資金の1万ドルを入手するために、エドは妻の不倫相手のデイヴに匿名の脅迫状を送る。婿入り社長のデイヴは妻に浮気がバレることを恐れて、脅迫に従う。1万ドルを手に入れたエドはゲイの傾向のあるセールスマンに投資して、ドライ・クリーニング店のオーナーに収まる予定になるが、その一方、開店資金が脅し取られて新しい支店の話が立ち消えになったために、支配人になり損ねたドリスは荒れ、出席した従妹の結婚式でも嫌味をいいたす。恐喝の犯人探しを行っていたデイヴは怪しげなセールスマンに目を付け、彼からエドが出資者であることを聞きだし、ある夜エドを呼びだす。怒り狂ってエドを問い詰め、襲いかかるデイヴに身の危険を感じたエドは、思わず手にした葉巻ナ

イフでデイヴを刺し殺してしまう。

「普通に過ごしていた」エドはここから、「普通」が孕んでいる異様さへと一步を踏み外していく。だがエドの物腰は一向に変わらず、黙々と表情を変えず客の髪を刈りつづける。翌朝、刑事が床屋にやってきて外に呼びだされたエドは、自分の犯行がバレたと思って観念するが、そのときでも顔色一つ変わるわけではない。ところが、刑事はエドにデイヴの殺人容疑でドリスが逮捕されたと告げる。それを聞いてもエドは微動だに一つしない。しかし、妻が自分の身代わりとして逮捕されたことに負い目を感じているのか、それとも妻に対する夫の努めからなのか、エドは知り合いの弁護士ウォルターに相談して、腕利きの弁護士に依頼するという手を即座に打つ。だが遣り手の弁護士ですら、アリバイも証人もなしの中で行き詰まってしまう。エドはこの事件にもしかするとかかわっているかもしれないセールスマンを訪ねるが、その彼も行方をくらませている。

ドリスは逮捕され、デイヴは死に、金も消える……という八方塞がりの状態でも、エドは眉一つ動かさず、来る日も来る日も髪を切りつづけ、当てのない裁判費用を捻りだす。そんなやりきれない彼の気持に唯一安らぎを与えてくれるのは、ウォルターの娘の可憐なバーディーであり、彼女が奏でるベートーベンのピアノソナタの音色に耳を傾けるために、ウォルターの家を訪れるのがいつしかエドの楽しみになっていた。初公判の当日、ドリスが自殺したとの突然の知らせが入り、裁判は打ち切られる。エドが差し入れたドレスのベルトで首を吊ったのだ。無実を叫ぶわけでもなく、弁解の一言も残さずに逝ってしまったドリスの意味不明な自殺に、弁護士は肩透かしを食らい、兄の床屋は酒浸りに陥る。だがエドだけは何事もなかったかのように、床屋を守るために助手を雇い入れて仕事に精を出す。

ある日、検死官が床屋を訪れてエドにドリスが妊娠3カ月だったことを打ち明ける。しかし、エドとドリスの間にはずっと以前から夫婦生活は途絶えていた。衝撃的な事実が次々と襲いかかってきても、相変わらずエドの整った髪は乱れることはない。もはや彼に残された唯一の場所は少女のバーディーの元にしかない。そんなエドの心を見透かすように、バーディーは彼にやさしく振る舞ってくれ、エドは彼女の人生が輝きのあるものであることを心から願って力になろうとする。エドは自分の失った夢を託すように、彼女に本格的なピアノの勉強を勧め、一流のフランス人音楽教師がいるサンフランシスコに連れて行く。しかし、バーディーのピアノを聴くなり全く見込みなしと宣告された二人は帰途につくが、車中エドは今回の結果をバーディーに詫びる。彼女はエドの頬にそっとキスをして、自分のためにわざわざ骨を折ってくれた礼をしたいと、いきなり彼の股間に顔を埋めようとするので、エドはそれを払いのけようとして事故を起こしてしまう。

病院で目を覚ましたエドに、彼のベッドを取り囲んでいた警官が逮捕すると告げる。セールスマンが殺されて池の底で発見され、カバンの中からエドのサイン入りの契約書

と1万ドルが見つかり、地方検事がドリスに金を盗ませた上、エドがデヴィッドとセールスマンを殺したとでっち上げたのだ。同乗のバーディの無事を知ったエドは家を担保に今度は自分のために弁護士を雇うが、その甲斐もなく死刑を宣告される。「苦しみを与えた人には悪いが、悔いは何もない。何一つ。床屋だったことを悔いたことはある。」と彼は呟く。エドが最後に辿る刑務所の廊下の突き当たりに死刑室のドアが開いており、まるで床屋のイスのように電気イスが革バンドを開けて彼を待っている。彼は初めて剃刀で自分のふくらはぎの毛を剃られていく。男たちの髪形が小窓に見える中で彼はいう。「オレはどこへ？ この世界の先に何があるのか。恐ろしくはない。霧が晴れるように何か答えが見つかるだろう。ドリスにも会えるかも。そこでなら彼女に言える。この世の言葉では言い表せないことを……」

この映画の原題は“The Man Who wasn't There”でありHereではなくThereであるところに、自分が本当に手を下した殺人では罰せられず、自分が関与していない殺人で死刑が執行されていく、「どこにもいなかった男」が象徴的に浮かび上がってくる。だが「どこにもいなかった男」は、彼が床屋であることとつながっていた筈だ。「髪の毛は不思議だ。自然に伸びてくる。ほっとくと伸びる。髪の毛は人間の体の一部なのに、切って捨ててしまう。俺はこの髪を捨てる。ゴミに混ぜて捨てる」と彼は呟く。「悔いは何もない」と最後に言い残しながら、「床屋だったことを悔いたことはある」というのは、かれは顔ではなくヘアスタイルですっと人を見てきたからだ。「人間の髪は伸びる」ように、人間の欲望も心の中で伸びる。妻ドリスの体の中で自分の見知らぬ生命が育み、唯一の希望だった少女の心の中にも生臭い欲望が芽生え、何より自分の髪は不自然なまでに整えられている彼自身の心の中にも突き上がってきた床屋の日常生活からの脱出願望。

第二次大戦直後の49年のアメリカは、ドライ・クリーニングというベンチャービジネスとアスファルト舗装、高級品志向のデパートに象徴されるように、国民の誰もが“アメリカン・ドリーム”を夢見る最も豊かな時代の幕開けであった。全編モノクロ映像が登場人物だけでなく、時代の陰影の奥行きを際立たせる効果をもたらしている。いうまでもなく誰もが夢見る“アメリカン・ドリーム”は誰にも訪れてくるわけではないのに、地道な生活を勤しむ人々をその夢に向けて駆り立てていったのである。義兄の経営する雇われ店員にすぎないエドがどのような社会的評価に甘んじなければならぬかは、妻の弁護士料を工面するために義兄と共に金を借りに行った銀行で、従業員でしかないエドが一人オフィスの外で待たされるシーンにあらわされている。しかも彼の稼ぎでは、デパートの帳簿係として勤める妻の派手な生活を満足させることはできない。

目の前で何が起こっても顔色一つ変えず、喜怒哀楽を忘れ去ってしまったようなエドはたとえ外面からはそのようにしか見えなかったとしても、必死に耐えていたのである。

必死に耐えていることが日常の態度に自然に見えてしまうぐらい、耐えていたのだ。床屋の雇われ店員という小さなボックスの中で喚いてみせても、自分がより一層哀れで滑稽に思われてくるから淡々と無表情を装っているだけであった。いくら自分が不甲斐ないことがわかっていても、妻の不倫に心が動かない男などいなかった。しかし、彼は怒りを爆発させなかった。それほど彼の絶望は深かった。エドは少女のバーディに、「とにかく君はまだ若い。君の人生はこれからだ。だがその人生も早めに手を打たないと空しく過ぎてしまう。お願いだ。これ以上浪費されてく人生を見たくない」といって、彼女の才能を引きだすためにサンフランシスコへと車を走らせるが、彼はもちろん、自分のことを語っていたのである。

妻の不倫、交通事故死に遭遇して絶望のどん底にいた映画『 SHIPPING・ニュース』の主人公は、娘と叔母と共に移住した故郷の島で自分の人生を立て直していく一步を踏みだしつつあったが、エドもまた、自分の空しく「浪費されてく人生」に手を打とうと一発逆転の計画を心ひそかに思い描いていた。それは、彼の“アメリカン・ドリーム”を実現するドライ・クリーニングの事業のオーナーであった。エドがこの胡散臭い儲け話に飛びついたことから、地味な男の人生の歯車が徐々に狂い始めるとか、彼のどこにそんな生活の変化を求めるエネルギーが潜んでいたのか、などという評言がみられるが、そうではない。儲け話がエドのところに飛び込んできたのではなく、待ちかねていたエドのほうが儲け話に飛び込んだのである。また、日々静かに客の髪を刈りつづけるエネルギーと、そんな生活から抜け出そうとするエネルギーは同量であった。

だが現実はずべて、彼の思惑を越えていた。ビジネスの資金を妻の不倫相手からむしり取ろうとするのは、寝取られた側とすれば報復としても理解できる範囲内の行為であったかもしれない。だが彼は相手を殺すという誤算を犯した。その事件で逮捕されたのが妻であり、しかも妻が自分の無実を訴えないというのも思惑外^{とど}であった。その妻が公判前に獄中自殺し、妊娠3カ月であったのも意外であった。止めは大人の害毒に汚されていないと思われた清純そうな少女が、中年男にオーラル・セックスを仕掛けてくるようなとんでもない娘だったことである。ここですでに自分に破綻していた男は、唯一の希望であった他人（少女）にも破綻したとしかいいようがなかった。「普通に過ごしていること」が、“アメリカン・ドリーム”に追い立てられていったことの末路であった。

「悔いは何もない」とエドはいう。彼はひたすら床屋の日常を耐えて、その枠から飛びだすためにやるべきことはやったのだから。他人が腰をかけていた床屋のイスに自分が腰をかけたとき、そのイスが死刑室の電気イスに変わっていただけの話なのだ。

「救われないラストへ向かっていくこの作品のストーリー展開は、一見冴えない男の暮らしが突如非日常的な悪夢に変わってしまうという風に見えるが、むしろ“社会の繁栄と成長から完全に取り残された男”のあがきとして必然的な帰結ですらあったという解

釈も成り立ち得る」(谷川建司『キネマ旬報』02年5月上旬号)という指摘もみられるが、もちろんこの男が問題なのではない。視線を注ぐべきなのはこの男が表現している「普通に過ごしていること」のほうであって、「普通に過ごしていること」もまた、輝きを夢見る、いや、「普通に過ごしている」からこそ、たえず輝きを夢見ることをしられつづけているということが、つまり、輝きを夢見てたえず「普通に過ごしていること」から逃れたいくなるような、「普通に過ごしていること」の尋常ではありえなくなっている世界がそこに映しだされているということではないか。

『バーバー』は「普通に過ごしていること」がもはや人々に満足感を与えられず、脱出願望をいつも掻き立てずにはいられなくなっている空疎な様相を描写していたと思える。無表情のエドのまなざしはどこかもの哀しく、じっと宙を見詰める瞳の奥には自分がなりたいものにものにも出会えていない^{はかな}儚さが浮かんでいる。日常からの脱出を試みて変化を求めた男は、確かに逮捕され死刑を宣告されることによって、思いも寄らなかった最大の変化、変化を求める自分自身がこの世から消え去るという最大の変化に直面することになった。床屋の中にいても、外に一步踏みだしても、床屋のイスが電気イスに直結していることを男は覚ったのだ。寿命を終えるまで床屋という電気イスに縛りつけられたままでの生活が続けるよりも、たとえ床屋から転がり落ちて寿命を断ち切られることになったとしても、その電気イスのほうを男は選択したのだ。

男が宙を見詰めるその先には、巨大な“円盤”が夜空に浮かんでいる。男は納得したかのように小さく頷いている。まるでその“円盤”に乗ってこの世から飛び立っていくことが納得されているように。「普通に過ごしていること」は、宙空に浮かんでいる“円盤”のようなものだろうか。よくよく見詰めれば“円盤”などどこにも見えないように、「普通に過ごしていること」なんかもどこにもなく、「普通」にはなかなか晒けだされてこない不可思議な人の心が一杯詰まっていることがこちらに押し寄せてくる。「普通に過ごしていること」、それは「迷路」のようなものだと言はいう。「それは迷路を離れた所から見る気分だ。迷路の中では曲がり角に来るたびに迷い何回も行き止まりにぶち当たる。だが離れた所からすべてを見ると - それは自分の人生の形なのだ。説明が難しいのだが、全体を見ると安らぎを感じる」

「普通に過ごしていること」は、どこにもありえない「普通」という観念の中に閉じ込められて過ごしていることなのだ。それぞれの「普通」の状態の中に広がっている「迷路」を、「普通」の外に広がっている「迷路」と重ね合わすことのできる「全体」の視野を手に入れたとき、「普通に過ごしていること」ができなくなっている場所にも、「普通」に出かけることができるにちがいない。

2002年7月27日記